ISSN 0388-5569
VOL. 6 NO. 1
(通巻16号)
1985.2

Library News

山口大学附属図書館報

目次

より身近かで親しみのある図書館へ　吉村　弘……1
思い出すことなど……竹永久太郎……3
<お知らせ>
図書館業務電算化の現状について……5
工学部分館（増改築）のご案内……6
人事異動……7
寄贈図書……8
日　誌……8

より身近かで親しみのある図書館へ

吉　村　　弘

1. はじめに

図書館は，研究・教育のうえで，全学的にみても重要であろうが，経済学部にとっても正にそうである。ちなみに，59年度の経済学部全予算のうち図書資料費は53％を占めている。全予算のうちから，実際には使えない節減額，臨時的な特別設備費・特定研究費を除くと，図書資料費は60％になる。この図書資料費には，図書館分担金や事実上図書購入にあてられている附属施設（東研）経費は含まれていないので，それらを含めれば，もっと高い割合になる。さらに，同窓会からの委任経理金等は，学部予算に入っていないが，これらによる図書資料の購入も年々相当額に達する。10年くらい前に，同程度の規模の経済学部10個くらいについて，予算に占める図書費の割合を調べたことがあるが，その時には本学部がトップであった。現在はどうであろうか。

このように，経済学部は図書資料の充実に並々ならぬ意欲を示してきたといえるように思える。しかしながら，何年間か図書館運営委員として，また学部図書委員として，図書に関する業務に携わってきて，近年ある種の変化を感じている。それは，図書館（本館）と教官との関係が薄くなりつつあり，疎遠になりつつあるのではないか，さらに，最近では一種の「あきらめ」も生じつつあるのではないか，ということである。これは私の思いちがいであろうか。

2. 教官へのアンケート

そこで，思いたって，学部教官にアンケートをお願いした。留学中の方を除く32人のうち22人（30歳代7人，40歳代7人，50歳代以上8人）から回答をいただいた。記して謝意を申し上げたい。結果はすでに報告済であるが，ここでその一部を紹介させていただきたい。

もとより，サンプル数もわずかであり，また学部によって事情も異なるであろうから，これによって一般を推しはかることはむずかしいかも知れない。1つの例示として御覧いただきたい。

イ　「本館へ今月何回行きましたか」

なし	1回	2回	3～5回	6回以上
12	3	3	2	2

今月（60年1月30日調査）は冬休みもあったので普通の月とはちがうであろうが，でも，あるいは資料室の充実のためであろうか，案外図書館に行く回数は少ない。

ロ　「本館へ行く回数は最近1年間は前年に比べて増えましたか」

増えた	変わらない	減った	答なし
2	8	11	1

理由はもちろん種々あろうが，予想どおり本館へ行く回数は減っている。

ハ　「本館へ行くのは何のためですか（3つまで）」

雑誌の借出	10	返　却	4
書庫の図書の借出	9	雑誌をみる	4
新整理図書の借出	6	コピー	2
リファレンス	5	その他	3

やはり借出が多い。私の感じではリファレンスが意外に少ない。

ニ　「本館に今月何回電話しましたか」

なし	1回	2回	3～5回	6回以上
17	1	3	1	0

電話回数は少ない。電話の目的は，リファレンス3回，新整理図書の借出1回，受入・購入1回で，他にはなかった。

ホ　「本館はあなたにとって身近かですか」

	計	30歳代	40歳代	50歳代以上
大いに身近かで親しみがある	2	1	0	1
少しはそうである	7	0	4	3
あまりそうでない	11	4	3	4
殆どそうでない	2	2	0	0

ヘ　「本館への身近かさ，親しみは増しましたか（最近1・2年）」

	計	30歳代	40歳代	50歳代以上
大いに増した	2	1	1	0
少し増した	0	0	0	0
変わらない	13	3	5	5
少し減った	6	2	1	3
大いに減った	1	1	0	0

若い人に「親しみが少ない」のは「日が浅い」ということだけのためであろうか。また若い人の「親しみ」が他の年代に比して増えているように見えないのも気がかりである。

ト　「本館のコンピュータ化について」

	計	30歳代	40歳代	50歳代以上	大いに親しみがある	少しある	あまりない	殆どない
大いに進めるのがよい	4	0	1	3	1	3	0	0
少しずつ進めるのがよい	12	3	5	4	0	4	7	1
あまり進める必要はない	2	1	1	0	0	0	2	0
進める必要はない	1	1	0	0	0	0	1	0

おおむね進める方向であるが，若い人ほど消極的とはどういうことであろうか。また，本館に対して親しみのある人はどコンピュータ化という図書館のめざしている道にも理解が深いように思われる。

自由記入欄にも貴重な御意見をいただいたが，ここでは割愛する。

3. おわりに

以上は，先におことわりしたとおり，ほんの1例である。利用者からの一方的な見方であるし，突込んだ質問もしていないので，原因など探り出すすべもない。ただ，「疎遠になりつつある」という私の感じも，まんざら当っていないわけでもないように思える。もしそうだとしたら，図書館サービスの提供者にとっても利用者にとっても不幸なことである。世は正に情報化時代であり，全国的な，否海外も含めた，データ通信網の進展は急激である。図書館は中でも大きな変化を被る分野の1つである。また，図書資料の量は，データベースも含めて，膨大なものとなっており，その適切な管理に対するニーズは極めて強く，図書館への期待もそれだけ大きい。それに応えるためにはサービスの提供者と利用者のお互の努力によって意志疎通をより良くし，図書館をいっそう身近かで親しみのあるものにすることがまず大切のように思われる。図書館運営委員としての反省も込めて，そのように思うことしきりである。

（経済学部教授）

思い出すことなど

竹　永　久太郎

昭和57年12月「山口大学30年史」が刊行された。私の図書館歴もいつの間にか30年が過ぎて，この春定年を迎えることになった。ただ慢然と過ごした歳月ではあったが，振り返ってみるといろいろなことがあった。いま，思い出すことなどを思うままに書いてみたい。

わが山口大学の附属図書館にとって，昭和45年の統合移転・中央図書館の建設は画期的であった。それまでの図書館は，各学部毎に分館があった。本館は経済学部のなかに間借りして，各分館間の連絡調整を主な業務としていた。当時の分館は，経済学部分館を除いては，書庫や閲覧室は教室等の施設の一部を使用していた。このような状態のなかで，早くから中央図書館の建築が望まれていたが，大学の吉田地区への統合移転を契機に，中央館の建設計画が急速に具体化し，昭和45年２月に本館と文理，教育，経済，農，教養の５分館が統合して遂に中央図書館の実現を見た。

この中央館の建設は，単に建物が新らしくなり，施設・設備が近代化されたということに止まらない。５つの分館が廃止され，運営機構と事務組織が一変したことの方が，わが図書館史上一大変革であったといえる。施設の面では，統合前に比べて閲覧座席数が大きく確保され，開架図書が大巾に増え，利用環境が著しく改善された。運用面では，当時としては先進的な全館開架制（書庫内自由検索）の実施，夜間開館の充実，指定図書の拡充，参考業務の本格化などがあった。運営機構の面では，従来の分館長会議に替って，本来の図書館運営委員会が機能化し，図書選定委員会（現図書委員会）が設置された。また，事務組織に関しては，雑誌（資料）係と参考係が新設され，本館の庶務・会計と全館の連絡調整，渉外業務を行なう総務係が設けられた。

これらの量的，質的変革は，当然図書館利用者に直接の影響を与えずにはおかない。図書館の学習的機能の対象である学生にとっては，従来の分館当時からみれば，諸般にわたって著しい改善であった。今までの分館時代の施設・設備は余りにも劣悪であり，学習的機能が極めて不十分とならざるを得なかった。当時の閲覧業務は職員の片手間に処理されていたのが，統合後は専従の閲覧係が設けられた。これでようやく他大学図書館の水準に達したといえよう。

一方，図書館の研究的機能の面ではどうであっただろうか。教官にとっては，むしろ従来の分館時代の方がよかったと考えられる点もあったと思われる。研究室と図書館との距離が遠くなった。同じ屋根の下で廊下づたいには行けない。今までは同じ学部で図書館職員にも馴染みがあり，多少の融通や無理もきいたが，今度は他部局の職員として親近感がもてない。今までは分館の誰れに聞いても話しは通じたが，今度は何係に行けばよいのか，誰れに頼めばよいのか当惑する。図書整理のおくれや雑誌の欠号などにクレームがつけにくい。その上，図書館の運営費に建物や機構が大きくなっただけに，これまで以上の予算の拠出が求められる。などが考えられる。たしかに，当を得ている点もあろう。図書館を大学全体のなかで，一共通部局として考えるという視点からすれば，図書館の見方も多少変ってくるのではなかろうか。図書館との物心両面からの距離感も，ある意味では<慣れ>であろう。いつも図書館に出入りされる教官も少なくないことが，このことを証明している。しかし，問題は図書館（職員）の側にも大いにあるであろう。図書館の使命を自覚して，利用者へのサービス精神に徹し，日常の業務に当ることを忘れてはなるまい。このような問題が運営委員会や図書委員会の話題となり，教官との懇談会が持てるようになれば，図書館ももっとよくなるであろう。

このような事態のもとで，図書館白書の刊行が計画され，統合の翌年昭和46年夏から49年の秋にかけて，多少の中断はあったが，館長を中心に館内で熱心な検討が行なわれた。白書は，図書館の現状と問題点を提示して，広く全構成員の意見と批判を求め，各位の理解と協力のもとですぐれた図書館改革の実現をめざそうとするものであった。そのなかでは，大学における図書館の位置づけと役割り，図書館の管理運営機構のあり方，図書館資料の共同利用，図書館の予算，業務の改善・近代化などについて述べられた。残念ながら，多大のエネルギーを費して脱稿にまでこぎつけたこの「図書館白書 ― 大学図書館の近代化」（1975）は予算の都合で遂に刊行するに至らなかった。序でながら，山口大学教職員組合の図書館問題対策委員会からは「図書館白書 ― 山口大学の教育と研究をささえる附属図書館の再建と発展をめざして」が1978年10月に刊行された。この白書の副題が示すように，図書館は学内諸矛盾の焦点となっていた。

統合後今日まで一貫して図書館の中心課題は，何といっても予算と定員の問題であった。図書館の予算は，本来ならその必要額全部を学部等と同様に（固有の教官・学生はいないけれども）文部省予算に積算されるべきであろう。現状は，必要額の何分の一かを図書館維持費（運営費）と図書館設備費（図書購入費）として配布され，その額はほんの呼水程度で，大部分は学内予算に依存せざるを得ない仕組みになっている。このことが，図書館が学内で弱い立場に追いやられている原因となっている。図書館の予算は，昭和53年度まではその要求額を図書館運営委員会で審議し，そこで承認されたものを大学の予算配分委員会に提出して，その査定に委ねるという方式であった。運営委員会の審議の過程では，要求項目や要求額についてその必要性は何とか認められながらも，それが必ずしも本音とは受け止め難い節があった。運営委員は図書館側の委員である前に，各部局からの選出者であるから，その立場は十分うなづける。

昭和54年度に予算配分検討委員会が設けられ，そこで審議の結果，今後5年間は図書館，学生部の予算配分は，従来の年度毎の要求査定方式を改め，物件費（一般の運営費）と人件費（非常勤職員の賃金）に分けて，前者は大学予算の対前年度伸び率によって，後者は公務員のベ・ア率によって自動的に配分額を算定する方式になった。図書館としては，人件費については一定の安定感はあるが，物件費については，そのベースとなる額に若干の配慮があったにしても，元来極めて不十分な基礎の上のパーセントでは，しかも臨時費は今後認めないという条件つきでは，手続的には楽になったが，いささか易きにすぎる感じがしないでもない。この新方式は5年を経過した59年度も継承されており，再検討の動きはなさそうである。

図書館の予算については，歴代の館長にとって頭痛の種であった。予算配分委員会で机をたたいて激論を交わされた館長もあったように聞いている。かつては，図書館業務に欠かせないタイプライターやカード箱さえも買えず，備品らしいものは一切我慢した時期もあった。また，昭和52年だったろうか，閲覧室，事務室とも館内の中央暖房を完全に停止して細々とガスストーブで一冬を過ごしたこともあった。その後も中央暖房は部分的に停止し，館内清掃も面積と回数を大巾に縮減した。閲覧室や書庫内も極端に節電するなどやりくり算段してきた。

図書館の定員は，統合時は24人であったが，最近は23人を維持している。定員外の非常勤職員は，統合時の6人が現在は11人（新たにパートタイム職員5人増）となった。これは近年の学部・学科の増設による教官・学生数の増加によって著しく増大した事務量に対応するためであった。このことは，図書館定員の絶体的不足と，非常勤職員への依存度が異常に高いことを物語っている。

図書館の予算と定員の問題については，機会あるごとに図書館からも，教職員組合からもそれぞれの立場で全学に強く呼びかけ，大学当局に切実な要求として訴え続けてきた。そのために，次第に全学的にこの点の認識が浸透し，一定の理解が得られるようになってきた。予算の面では，昭和54年度以降図書整理費として在山部局からの拠出が定着化するなどの配慮が示され，また，定員の問題でも昭和42年度に始まった6次に及ぶ定員削減については，他部局の定員増の振り替えなどにより実質的に定削が緩和されてきた。

しかしながら，予算と定員の問題が根本的に解決したわけでは決してない。予算については，運営費をはじめ学習用及び基本参考図書購入費の安定的確保，定員については，学内事務系定員の再配分，不安定な非常勤職員問題の解決などの基本問題がある。また，図書館資料の共同利用を建前とする合理的運用，電算化を含む図書館業務の改善，本館と分館との関係，そして何よりも全学的視野に立つ図書館の管理運営の問題がある。図書館が抱えるこれらの諸問題はいずれも大問題ばかりであるが，全学構成員自らの問題として捉え，解決への糸口を探る努力が必要であろう。図書館が大学の〝附属〟ではなく，真に教育・研究の〝中枢〟となり〝心臓〟となって十分にその機能が発揮できるように，差当り，図書館運営委員会なり，最近発足した大学の組織及び運営の〝見直し委員会〟なりで問題の提起が行われることを期待したいものである。

最後になりましたが，今は亡き初代の図書館事務長であった佐久間三雄さんをはじめ，私の図書館生活30年間を温かく包んで下さった先輩や同僚の皆さん，学内の教職員の皆様に心から感謝の意を表して，厚くお礼を申し上げます。

（整理係長）

〈お知らせ〉

図書館業務電算化の現状について

1. 業務の電算化計画概要

本学附属図書館でも，図書館サービスの向上を図るため電算機による図書館業務処理を検討してきたのであるが，昭和56年８月「山口大学情報処理センター」の発展的改組を契機として，そのハードウェアーを用いてＮＥＣのサポートの下で，具体的にその電算化開発に着手した。

図書館業務は，(1)図書館資料の発注，受入，支払等の業務（図書管理システム），(2)目録作成業務（目録管理システム），(3)雑誌の発注，受入，支払等の業務（雑誌管理システム），(4)図書館資料の閲覧管理業務（閲覧管理システム），(5)参考業務及び各種の文献情報等の提供業務から構成されるが，本学附属図書館での業務処理の電算化計画は，上記業務中，(1)，(3)，(4)の業務を中心に電算機により処理するよう開発をすすめてきた。当初の３ケ年計画では，比較的開発が簡単な「閲覧管理システム」をとりあげ，逐次「雑誌管理システム」，「図書管理システム」の開発を行うことでスタートした。

2. 業務の開発状況と課題

1） 閲覧管理システム

本システムの開発には，プログラム作成約40本，開架図書等（図書約55,000冊，雑誌約85,000冊）の初期データ入力及びそれに伴うＩＤラベルの貼付作業，利用証の発行等の業務を処理しテストランを経て昭和57年４月から図書コードによる図書館資料の貸出・返却等の業務電算化を実施した。昭和57年度には，貸出期限（２週間）超過の図書について督促業務及び利用統計業務の電算化の開発を行い，その電算化を実施した。これら業務の電算化は，当初第１年次（昭和56年度）に開発を終わることを目途としたが，実際は約１年６ケ月の期間を要した。

2） 雑誌管理システム

本システムの開発は昭和57年度後半から着手した。雑誌の発注，支払，精算等の業務及び雑誌の到着状況チェック等の業務を処理するため，和雑誌約6,000タイトル，洋雑誌3,500タイトル計約10,000タイトルの雑誌について，雑誌名，発行形態，和洋別，発行国等のデータ入力を行い，雑誌マスター，発注マスター，受付マスター等を作成してきた。さらに，当該業務を処理するため約60本に及ぶプログラム開発を行い，テストランを進めた。

本業務は，情報処理センターとOn－Line によりその処理に当っているが，情報処理センターの利用者，利用件数の増が著しく，当初予期できなかったＣＰＵの容量不足，利用時間の制限等が発生し開発にやや支障をきたしたこと（ハード面の制約）及び本システムの基本設計，業務処理マニュアルの作成，またＳＥ等との対応が円滑に進まなかったこと（ソフト面の制約）等の要因により開発が遅延し，昭和59年４月から発注業務等一部の業務から順次電算機による業務処理を開始した。今後は，さらにセンターマシンレベルアップ（昭和59年８月）に伴うプログラム修正（各館からの同時更新処理の実現）を昭和60年３月までに，また製本業務等の残プログラムの開発及びテストランを昭和60年９月までに終了させ，本システム開発を完了させる予定である。

3） 図書管理システム

当初３ケ年計画で発足した図書館業務の電算化計画は，閲覧管理システム，雑誌管理システムの開発が上記理由で遅延したことから本システムの開発が遅れている。本システムの開発に当っては，全国共同利用施設として昭和59年度に東京大学に設置された「文献情報センター」の業務処理との関連および本学情報処理センターのハードウェアーとの関連を見極めながら開発を進める必要があることから，根本的に再検討せざるをえなくなった。また別の側面から見れば，本システムの開発は，目録業務の見直し，利用者に対する各種の文献情報提供サービスの検討等，今までの図書館における業務処理の方法，内容，範囲等を変換するものであり，且つ新たに目録管理システムの開発を加えたトータルシステムとしての電算機による図書館業務処理を目指すものである。これらの開発が終了するまでには，なお数年の月日が必要と考えられる。

3. 今後の開発体制

図書館業務のソフトウェアーは，ＮＥＣから無償で作成提供されることになっているが，３年余の経過を踏まえ，現時点では端末インテリジェント周辺のプログラム及びセンターマシン周辺プログラムのある部分の開発は図書館側で分担する等，徐々に図書館主体型の開発体制へと移行している。貸出・返却プログラムも図書館側で修正し，$\frac{1}{2}$以上処理時間を短縮した。

雑誌管理システムの残プログラム・図書管理システムのプログラムの大多数は，図書館側で作成することになる。そのことは，ⅰ山口大学への適応性，ⅱ適時性，ⅲ安全性，が図れるばかりでなく，ⅳ開発工数（日程）の短縮，Ⅴ館員のモラルの向上，ⅵ費用対効果の向上にもつながることになる。

図書館業務電算化の道は，長く遠い。しかし，それは「利用者」と「情報」とを効率的に結合させる手段であり，図書館サービスを向上させる道であると考える。館内の一致協力は言うまでもないが，大学当局並びに利用者各位の絶大なご支援無くしては実現できないと言える。ご協力を願うものである。

工学部分館（増改築）のご案内

昨春以来，増改築工事をおこなっておりました工学部分館は，館内の整備もほぼ完了し，１月９日より開館しました。

従来の建物が昭和48年12月に建築されてから10年が経過し，その間，学科増設による学生数の増加や蔵書増のため手狭となり，またサービスの面でも図書館の新しい動向への対応が困難となってきました。この様な状況の中で，分館の増改築に対する要望が強まっておりましたが，施設部の方々をはじめ関係者のご尽力により私共の予想よりも早い時期にその実現を見るに至りました。

総面積2,320㎡となり，これは従来の約1.8倍に当ります。部屋の配置は平面図の通りですが，「増改築」という制約の中にもいくつかの新しい施設・設備をそなえることができました。ここでは，これらを中心に紹介することにします。

◎グループ閲覧室……少人数のグループでの共同学習や読書のための部屋です。他の利用者の妨げとなることなく，お互いにディスカッションすることもできます。教官・学生を問わず，だれでも自由に利用できます。カウンターに申し出て利用してください。

◎単行書閲覧室……閲覧机はすべて衝立，照明付となりました。落着いて読書できることと思います。

◎雑誌閲覧室……２階のメインフロァーです。新着雑誌と主要二次資料のバックナンバーが閲覧できます。電子複写機も設置しました。

◎研究個室……教官に限り利用できます。多量の資料を利用しての研究や，論文執筆等の際にご利用ください。利用を希望されるときは，カウンターに申し出てください。

◎書庫……電動式集密書架を備えた書庫を増設しました。１階に単行書，２階に雑誌・二次資料の比較的利用度の低いものを収納しています。なお，従来の積層書庫には雑誌バックナンバーを収納し，１層には和雑誌，紀要類，２，３層には洋雑誌が夫々誌名順に排架してあります。利用者はどの書庫にも自由に出入りできます。

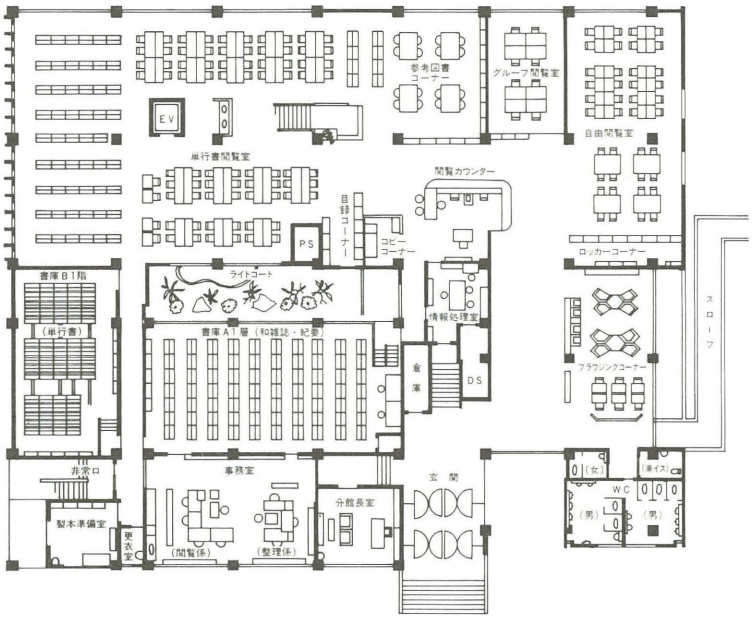
◎ブラウジング・コーナー……以前は自由閲覧室と兼用になっており，落着かない雰囲気でしたが，広くゆったりと休憩・談話ができるよう考慮しました。ロビー椅子や新聞閲覧台も新しくなりました。喫煙はこのコーナーでしてください。

◎身体障害者用設備……スロープ出入口，車椅子用便所，エレベーターを新設しました。スロープ出入口は空調時（夏・冬）を除き，一般利用者も利用できます。

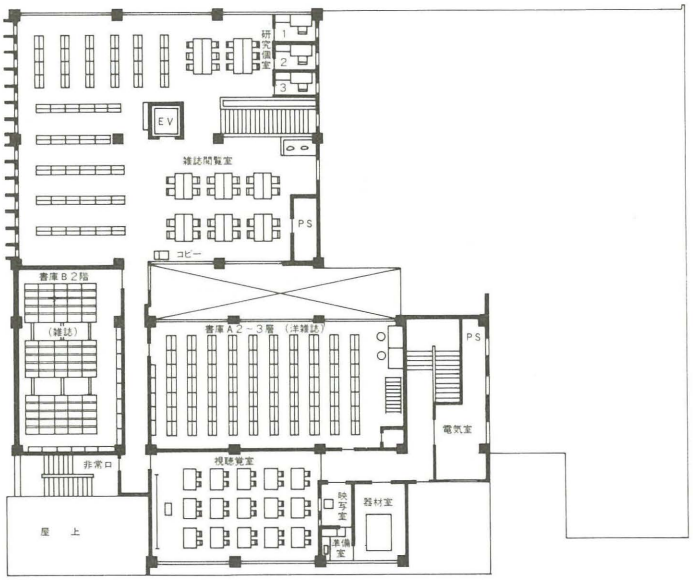
◎情報処理室……電算化業務の処理のための部屋です。本年４月からは，ＪＯＩＳ等の商用データベースを利用した情報検索業務も，この部屋で開始する予定です。

その他，全館冷暖房空調されており，家具類も新しくなって，明るく，しかもゆったりと落着いた雰囲気で好評を得ております。ぜひ，ご来館ください。　　（工学部分館整理係長　安田浩規）

【工学部分館平面図】



1　階



2　階

人事異動

〔昇任〕

繰田智晴　　閲覧課長　（広島大学附属図書館整理課図書館専門員から）59. 12. 1

〔配置換〕

澤田　健　　整理課長　（閲覧課長から）59. 12. 1

〔退職〕

永久昭二　　（整理課長）59. 12. 1

寄贈図書

（本　館）

野村男次（元本学教授）

食品工学との出合い　昭和52

（医学部分館）

藤田英輔（名誉教授）

句集　草枕　藤田一穂　1984

小西俊造（前学長）

医の心　1～4　北里大学病院医の哲学と倫理を考える会　丸善　1984

松本　昇（医療技術短期大学部　教授）

メディコピア　11　山中学等編　富士レビオ　1984

内野文弥（医学部　教授）

Recent advances in RES research. Vol. 14, 18, 21/22. The Japan Soc. of RES. 1974－83.

（工学部分館）

松田好晴（工学部　教授）

基礎有機電解合成　D.Kキリアンコウ著　松田好晴訳　培風館　1985

日　誌

10月16日（火）　工学部分館図書委員会
10月20日（土）～21日（日）　図書館職員親睦レクリェーション（熊本・阿蘇）
10月23日（火）　医学部分館図書委員会
10月26日（金）　工学部分館新営・改修工事竣工
11月1日（木）　機械化推進委員会及び電算化のためのＮＥＣとの定例会
11月5日（月）　研究集会第4回準備委員会
11月6日（火）～9日（金）　昭和59年度大学図書館職員講習会（京都大学）
11月7日（水）　工学部分館図書委員会
11月8日（木）～9日（金）　第11回国立大学図書館協議会中国四国地区協議会及び同係長会（出雲・島根厚生年金会館）
11月13日（火）　工学部分館図書委員会
11月14日（水）～16日（金）　第25回中国四国地区大学図書館研究集会（山口・山泉荘）
11月28日（水）　第14回本館図書委員会
12月5日（水）　機械化推進委員会及び電算化のためのＮＥＣとの定例会
工学部分館図書委員会
12月17日（月）　第43回附属図書館運営委員会
12月17日（月）～1月8日（火）　工学部分館新営改修建物へ移転作業のため休館
1月9日（水）　工学部分館新営改修建物で業務開始
1月10日（木）　機械化推進委員会及び電算化のためのＮＥＣとの定例会
1月17日（木）　図書館職員研修会：大学図書館業務の電算化について（広島大学総合情報処理センター助教授　池田秀人）
1月24日（木）～25日（金）　昭和59年度国立大学附属図書館事務部長会議（岡山，郵便貯金会館）
1月30日（水）　第15回本館図書委員会

編集・発行　山口大学附属図書館　〒753　山口市大字吉田　電話（0839）22－6111　内線788